

希望と計画

倉橋惣三



希望は人を生かす
事を生かす。

近世の傾向として、教育が、しばしば仕事になりすぎ、殊に組織の中に動かされていく事が多い。そのために、教育に失望や、歡喜の、生きた氣持が失われる事が少くない。併しこれでは、生命ある教育が出来ないのみならず、教育の日々をして生命あらしむる事もできない。現代の教育が、屢々さくばくとして、灰をかむの思いに陥らしむるゆえんであるかも知れない。昔からの所謂、偉大なる教育者の生涯も、必ずしも成功とのみ限らない。しかも、なるも成らぬもその人の生涯を、或いは生涯の各断面を、播り動かさずにいない歡喜や失望の連続であつた。これは即ちその人の教育に生きるゆえんであつた。教育が我が事であつたゆえんである。一対教育は、相手に対してゆく仕事である限り、思ふようにはならない。屢々途中から脱落し、或は逃げてさえもいくであらう。教育は人生の生活の中で、失望を与える事の多い生活である。

ゆえんである。悲しみにたえない。しかし、それが自己の希望と共に動いているものであるがゆえに、相手が離れても自己を離れない。そこに失望と共に、よりつのる心も起つたり失望によつて教えられる大きな教訓なり、励ましなどがあつたりする。

教育の名に於て何が成るかは、必ずしも常に大きい事ではない。たゞ、教育に於てのみ相手と共に、或いは相手に拘わらず我の生きてゆけるゆえんもこゝにあるのであらう。すべての教育者、こゝろした意味に於て生きようではないか。仮に相手の為、何程の事をなし与え得ると否とに拘わらず、これによつて自分を生かしていこうではないか。悲しみの伴わない希望はないかも知れない。教育に於て殊に、そうである。仮にも、真実の教育を経験するものには、悲しみの方が失望の方がより多いのが常であるかも知れない。しかも、それでこそ、それによつてこそ、彼は生きていけるのである。

希望は我が持つものであると云ひながら、屢々我より大きなものであつて、我のとうよりもその中に我を置くといつた方がいゝ事が多い。これに對して計画は、ずつと、我の方に引きよせ、我自らが持ち、我自らが創りさえもする希望である。そこには、それを我がものとする事に於てさえ、全く自由の意志を妨がせている。そこで、希望はそれを達すると否とが必ずしも我にないが、計画は達するも達せざるも、我が意志に属する。それだけに、その達せざるや、悲しみは強い。強い乍らに、我が事という小ささを出でない。これを、達するや、その喜びは、箇中の喜びに属する。従つて、喜びも失望も我を励ますこと著しいが、又他を以て自らを慰めることもないではない。要するに、希望は、大であり、計画は小であるに過ぎないかも知れない。又、希望は自然であり、計画は人為であるところも多い。人為なるが故に、我と我に強い、我と我を努めしめる。怠る事は、できないのである。又、その立つるや、精にして密ならざるを得ない。これに反するは、怠るである。計画の成らざるを悲しむは、事の最後に於て、成らざるの悲しみよりは、その周到を誤まれるの悲しみである事が多い。人為の常である。希望は時に、事を明日に託して置き忘れる。世俗の達人は、急がば廻れとさえ教える。これをいゝ事にして、希望は屢々柵に置き忘れられる。計画はそうはいかない。今日の計画は、今日をまつ。今日をゆるがせにするは怠りである。自ら責めざるを得な

い。こゝに計画をもつものは、周到忠実ならざるを得ない。希望は時に、祈りて止む事があるかも知れない。計画はそうはいかない。計画は決算の督促がやかましい。それ程計画は、きびしい。時に、春風抬頭、千里の道を希望に揺られてゆく旅人もあるが、頼に行手を計算する計画は、短気ならざるを得ないのである。

楽しいかな希望、きびしいかな計画、人生は旅の如しという。旅は楽しいといひ、悲しいという。その何れにせよ、希望と計画となしに生を送ることは、幸にせよ不幸にせよ、徒勞である。希望と計画に生きるものは、屢々敢へて徒勞を求むるが如くして、実は人生を意義に重ねる。幼児の日々は樂し、希望をもてるや、計画をもてるや。幼児は或は、失望を知らざるの子であるかも知れない。悔いを知らざるの子であるかも知れない。これに變つて希望し、これに變つて計画するわらかかり又勞多きかな。幼児知らず、われらひそかに失望し、幼児知らず、我ら又しても悔ゆ。省みて經驗ありという。たつた少しの事に過ぎない。時に、身を希望に託して、将来を夢み、或いは、計画の中に、自己をしぼつて、辛じて怠慢を免かる。これを合せて喜びと為し得るものは、幸なるかな。或は希望の子といひ、計画の子という。その幸も又、何を計画するかでなくして、希望と計画をもつその事である。